
農業・肥料を使わない自然栽培リンゴの木村秋則さんと
ナチュラル・ハーモニー代表河名の対談講義録

「農薬だけでなく肥料を一切使わず野菜が育つ!？」の
無料ダウンロードをしていただきありがとうございます。

この度は、木村秋則氏とナチュラル・ハーモニー代表河名の対談講義録を無料ダウンロードしてくだ
さり、誠にありがとうございます。

ぜひ、じっくりとご一読ください。
みなさまの食の安全と感性を磨く一助となれば幸いです。

重要なお知らせ

今回の無料ダウンロードの特典

ナチュラル☆ライフ実践メルマガはこちらからご登録ください。

<https://1le.jend.com/stepmail/kd.php?no=4530>

ご登録いただくと随時、自然栽培セミナーの情報やナチュラル☆ライフに役立つ情報をお届けします。

株式会社ナチュラル・ハーモニー
<http://www.naturalharmony.co.jp>

「農薬だけでなく

肥料を一切使わず野菜が育つ!?!」



講 師)

木村 秋則(芸術自然栽培研究会 会長 写真左)

河名 秀郎(ナチュラル・ハーモニー代表 写真右)

保存版

©この著作の著作権はすべて(株)ナチュラル・ハーモニーに帰属します
無断転載・転記は固くお断り致します

著作権について

「農業だけでなく肥料を一切使わず野菜が育つ!？」(以下 無料対談講義録)は著作権法で保護されている著作物です。

「無料対談講義録」の使用、閲覧に際しましては、以下の点をご注意ください。

- ・ 「無料対談講義録」の著作権は(株)ナチュラル・ハーモニーに属します。
 - ・ 著作権者の事前許可を得ずして、「無料対談講義録」の一部または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、ビデオ、電子メディア、テープレコーダー、インターネット等)により、複製および転載することを禁じます。
- また、無断で放送、公衆送信、翻訳、販売、貸与等を行うこともできません。

免責事項

「農業だけでなく肥料を一切使わず野菜が育つ!？」は自然栽培の普及を目的としていますが、農業者が自然栽培の実践をされる場合、本講義録のみの知識で自然栽培を実践することは大変リスクがあります。

この講義録に記載されていることを実践して、損害が生じた場合においても、(株)ナチュラル・ハーモニーはその結果に責任を負うものではありません。あくまで自己責任の元、ご参考になさってください。

また、営農として自然栽培に取り組むことを考慮されている場合には一度ナチュラル・ハーモニーまでお問い合わせをいただければと思います。

～ 本対談は、2003年5月25日に行われたものに改定を重ねたものです。～

河名)

こんにちは、ナチュラル・ハーモニーの河名です。今日は集まってくださいます、本当にありがとうございます。私たちが“自然栽培”を中心とした事業を手がけて、今年で20年近くになります。その間は試行錯誤の連続であったのですが、昨年くらいから、自分たちが理想とするもの、それがようやく満足がいく形になってきました。そういう訳で、昨年11月に、『収穫祭』と銘打ってイベントを行いました。今回の「シードフェスティバル」は、言わばその延長線上です。展示やワークショップ、さらにはライブも含めてゆっくり楽しんでもらえればと思います。

今日の話は何かといいますと、3年前に無農薬のりんごが売られているという話を耳にしました。常識として、りんごは栽培が最も難しい作物で、無農薬で作ることは“絶対不可能”と言われているのです。それでも本当だということなので、まずはそのりんごを買って食べてみました。「パリッ」という音と一緒に舌というか、細胞にじんわり浸食していく、そんな感覚に見舞われたのです。おいしいとかそういう範疇をはるかに超え、「スゴイ!」、これが食べた最初の感想でした。さらに驚いたことに、そのりんごには芯がなかったのです。“芯のないりんご”、「何で?」という思いになりました。このりんご一個が、私たちの生命にとって大切な何かを物語っているのではないだろうか?そこで、これを作っている人に「会わなければ!」という思いに駆られ、青森に飛んでいきました。そのりんごの生産者が、ここにいる木村秋則さんです。

お会いして最初に、「どうして完全無農薬でりんごができるのですか?」と尋ねると、「肥料を入れてないからだよ」とお答えになったのです。その瞬間、全身がしびれるというか、なんとも表現のしようがない感激が湧き上がってきました。自分が追い求めてきたものは“本物”であって、これまでの歩みが報われたと心底から思ったのです。それからずっと木村さんは私にとって、自然を学ぶ師のような存在なのです。



木村)

弘前で農業をやっている木村です。今朝、弘前から8時間かけてバスでやって参りました。昨日はりんごの木をチェーンソーで伐っていましたので、今日はまだ手がしびれています。今日はよろしく願います。

【私のような馬鹿】

私が河名さんに会ったのはわずか三年前のことなのですが、なんだかずっと以前からお付き合いをしているように思えます。「私のような馬鹿がここにもいる!」、これが最初にお会いした時の印象でした。河名さんはものすごく思いの強い人で、初対面ですっかり意気投合してしまいました。今は北海道から奄美まで一緒に周らせて頂いております。

【白いアスファルト】

日本で一番農薬が使われている県はどこかと言うと、青森県です。そしてその3分の1が、日本のリンゴ生産量の4割強を占める弘前市を中心とした津軽地帯で使われております。「津軽海峡冬景色」で有名な歌手の石川さゆりさんが弘前を訪れ、「夏なのに何でりんごの木が白いのですか?」と聞いたそうです。原因は農薬なのですが、木のみならず、アスファルトが白くなってしまいます。そのくらいの量なのです。

この白くなる原因は、殺菌に使われる石灰ボルドー液の使用量が当時多かったからです。現在でも、JAS法では、使用を認めています。もちろん自然栽培では使わないわけですが……。

【青森県条例】

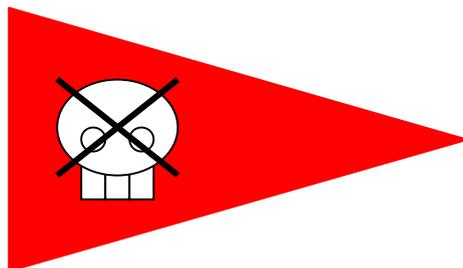
「りんごは何で作るのか?」、答えは「農薬と肥料」。これが当たり前の常識なのです。驚くかもしれませんが、青森県条例には「農薬または農薬と同等の効果を有するもので、防除し、徹底管理をなさい。」と定められているのです。2008年10月現在5つの条例があるそうです。1つの条例の違反金が30万円です。つまり、これに従わないと30万~150万円の罰金が科されてしまう。だから無農薬で作る私は、「県条例違反」になってしまうのです。こうしたことは、本当に悲しいことだと思います。

【自然栽培を目指して】

河名) 木村さんが自然栽培に取り組むきっかけをお話ください。

木村)

私はりんご農家に生まれましたので、小さいころから両親の苦勞を目の当たりにしてきました。当時の農薬は手散布で、現在、販売禁止にされている「マラチオン」という劇薬も使われていました。マラチオンは当時、「ホリドール」と呼ばれていました。



マラチオン散布場所に貼られていたドクロマークのイメージ図

これを散布した所には、“ドクロ(骸骨)マーク”が貼られていて、人が入らないように注意を促していたのですね。(前ページ、挿入はイメージ図です。)

毒性が強く、虫を殺すだけではなく、散布すると生産者自身がひどく体を壊してしまう。また人間もよくそれで自殺をする、こうした経緯でその後販売禁止になりました。「マラチオン」以外にも、当時使われていた農薬で、たくさん使用禁止になったものがあります。当時の農薬は安くて、しかもよく効く。私の手は農薬で皮が焼け、赤紫になっていました。生産を確保するために大量に撒く、それは止むを得ないこと。それでも私はできるだけ農薬を使いたくない。私が自然栽培に取り組むきっかけは何かといえば、こうした経緯からなのです。



【生々流転】

私は百姓が好きで好きで、その思いは自分でもどうにもならないくらいなのです。でも生産の現実には、農薬を多投し、体を壊すことが分かってながらも我慢し、撒き続けている。こんな栽培方法で作物を作って、一体誰が幸せになってくれようか？という疑問をいつも抱えておりました。一時は「百姓をやめよう！」と決意し、青森を出て横浜に住んでいた時期があります。しかし父親から「戻って来い！」のカミナリが落ちる。父親の声の大きさが次第にエスカレートしていき、ついに無視することができなくなりました。それで結局は青森に戻りました。

肥料を使わない農法は以前から頭の中にはありました。農薬を使うと目尻の辺りや腕の腹の部分など柔らかい箇所に湿疹が出てくるのです。これが痒くて痛くて、戻ってからも「百姓をやめようか」と何度も悩みました。では「何をするか?」、百姓以外に「自分に何ができるだろうか?」と考えてみても、まったく見当がつかない。そうした煩悶の末、最終的な目標である自然栽培を目指すことを決意しました。そのためにまずは農薬を減らすことから始めようと決意したのです。

私は3ヵ所の畑で一ヶ所ずつ散布回数を減らしていきました。最初は5回、2年目に3回、3年目に1回にしたわけです。虫は当然すごかったのですが、何とか作物を売ることができました。こうして4年の実験期間を経て、1haの畑を無肥料・無農薬に移行しました。無肥料の畑で、稲ワラの効果を検証する実験も行いました。さすがに完全無肥料で栽培することに一抹の不安がよぎったからです。“稲ワラ堆肥”を入れた圃場と入れていない圃場の比較を5年間続けましたが、ほとんど違いが見られなかったので堆肥を入れるのをやめました。

【生きとし生けるもの】

この他にも、私はさまざまな実験を行いました。例を挙げると、人が入ることのない雑木林の中にりんごの木を植えました。もうひとつは何にもない平地。最後はりんご畑の中。結果は、生育の度合いがまったく違ったのです。雑木林の中に植えたりんごは、10年経っても15センチほどにしか成長しなかったのです。人が入らない所なので、土もフカフカ、一見すれば、最も条件が良いように思えます。しかし実際は、ほとんど育たないのですね。それに比べて、同じ10年間で畑に植えた方の幹は、数倍太く育っている。このことは生きとし生けるものに共通した「根源的な事柄」、それを物語っているように感じます。人間も同じで、無人島に20年も30年も「一人で居ろ!」と言われれば、生きていけないように思うのです。りんごの木も一緒に、やはり周囲とのコミュニケーションがなければ生きていけない。こうしたことから、木は人間には分からない言葉で会話をしていると実感したのです。

【苦難の果てに】

いろんな実験を繰り返した末、本格的に自然栽培に取り組むことに決めました。しかしそれは同時に失敗の連続でもありました。いま皆さんの前で、笑って話すことができるようになって本当によかったと思うのですが、その過程においては何度も、しかもさまざまな失敗をしました。だから他の生産者の方には、私が犯した失敗を繰り返して欲しくない。私が覚えたすべてのことを伝えたいと思って、河名さんと全国を一緒に回っております。

河名)

2002年の6月15日に「芸術自然栽培研究会」を立ち上げ、その会長に木村さんになって

もらいました。副会長には自然農法成田生産組合の高橋博さんと大潟村自然栽培グループの石山範夫さんになっていただきました。一緒に仕事をさせて頂いていつも驚かされるのは、木村さんはほとんどすべての作物、一つ一つの作り方に非常に詳しく、研究なさっているということです。大根一本とってみても、木村さんには哲学がある。それは人間の側に立ったものではなく、大根の側に立ったものなのですね。この前、奄美で研究会を行ったのですが、なんと100名の生産者の参加がありました。このことは現状の閉塞感、多くの農家は苦しみ、困り果てているということを表しているように思うのです。見ていても気の毒になるような方が、みなさん藁をもすがる思いで参加してきます。

その中の質問で、“サトウキビ”についてのものがありました。木村さんは東北の人だから「さすがに答えられないだろうな」と思っていたら、スラスラと答えていく。何と云うか、自然界が持っているメカニズムを木村さんは体得している。メカニズムをしっかり把握しているので、あとは応用問題なのですね。私は何も作らない人間ですけども、情報を発信していく役割として、生産者と真摯に向き合い話をする。以前は自然栽培についても、どこか自信のなさも拭えなかったのです。生産者を前にして、少し引け目も感じたりもしていたのですが、木村さんや高橋さんにお会いしてからは、本当に自信を持って話ができるようになりました。

木村)

私もそうだったのです。「無肥料で自然栽培」というとすぐにイメージで“害虫の巣”、“収量が上がらない”と言われてしまいます。私は今の農業は農薬・肥料を入れる農法に洗脳されているように感じるのです。大切なのは頭を空っぽにして取り組むこと。当たり前のように感じていることが、実は当たり前でないという事実を受け止める姿勢が大切なのです。



【作物は作物自身が自分で作る】

多くの生産者は「私が作った大根、米、ジャガイモ」、このような言い方をよくします。でもこの発想が、本当によくないと思うのです。米を作るのは稲、大根を作るのは種子や土、そしてお日さまであって、人間は米粒ひとつ作ることはできないのです。みなさんタンポポを見てください。タンポポの大きさ、山のタンポポ、線路脇に咲くタンポポ、畑に咲くタンポポ、どれが一番元気だと思いますか？肥料など何もやらない線路脇のタンポポや山に咲くタンポポは、30センチくらいに育つ。それに比べて畑のタンポポは小さい。あたかも自分が作っているという思い込みや感覚を捨てることが大切です。

もし「私が大根だったら、ジャガイモだったら」と仮定してみる。そうすれば、こんな所に住みたいだろうか？こんなに農薬をかけられたいだろうか？という問いかけが生まれる。よく「子供の視点に立って」と言われますが、子供の視点に立つためには、しゃがんでみることです。土を見るためには目を近づけることなのです。私たちは単なるお手伝いに過ぎず、作物は自分で作るものなのです。「何々の生産者だ」と言って威張るものではないのです。

【大根は左にひねる】

みなさん大根はどのようにして育てているかご存知ですか？太陽が東から西に沈んでいきますね。大根は時計回りに回っているのです。私が観察した大根は、収穫までに8センチも回転しました。この前、20数年も大根を作っている生産者が「大根を抜くのは大変！」と言っていました。でもビスを引っ張ってみても抜けませんよね。大根は左にひねれば抜ける。根っこのあるものはみな同じです。そんなことも生産者自身が知らない人もいます。他にも2本足の大根の見分け方をご存知ですか？葉の先端が2本になっていたら2本足の大根なのです。先端が「私の根は2本ですよ」としっかり教えてくれる。抜くときには何とも言えない、「コクン」という音がするのですよ。

【勉強不足】

北海道から奄美大島まで周っていると、生産者の方々はいろんなことを言います。これも先ほどの大根と同じなのですが、「今年は雨が多くて収穫はイマイチだ」とか、よく言います。しかし実際はそうではないのです。たとえばジャガイモ。水っぽいジャガイモは生育の段階で水が多かったことを物語っています。水の多いところで育てれば収穫物は当然水っぽい。乾燥地に育つのがジャガイモですから、その環境を作ってあげることが大切なのです。こうしたことは「肥料」がとか、「農薬」がどうか、そういうこと以前なのです。基本となる大切な事柄を知らずに、自分の勉強不足を天候のせいにする。私たちも、雨に濡れたらすぐに着替えをするでしょう？私たちは着替えができて、ジャガイモにはできないわけですから。

【トマト・ナスの特性】

河名)

北海道に行ったときに、「ナス」と「トマト」を栽培している生産者が、作物が病気になった理由として、「自然栽培はカルシウムが不足になる」と言うのです。そうすると「木村の目」が瞬時に光るわけです。

木村)

トマトは乾燥地帯で、しかも高地の作物。ナスは雨が多いところの作物。この生産者はナスを高いところに植えて、トマトを低いところに植えていたのです。これでは当然病気になる。これを逆にしてあげれば病気にはならなかったと思うのです。皆さんどこか河原を見つけて、そこにトマトの種を置いておくと、びっくりするくらいおいしいトマトができます。その際、決して水を与えないことが大切です。水をあげないとかわいそうなのではなくて、そもそも必要がないのです。トマトは高地で乾燥地が原産ですから。

【トマトは斜めに植える】

河名)

本当に根本的なところですよ。天気、肥料、農薬といった問題ではないのです。

木村)

基本的なことを知らなければ、どれだけ品種改良を重ねても難しいわけです。トマトの茎や葉は上に伸びるのではなく、よく観察すれば下がり気味なのです。だからトマトは斜めに植える。斜めに植え、土に埋まる部分を根にする。土台を強くするために、第一関節くらいの深さで土をかける。第一関節にするのは、深く植えると根腐れが起きてしまうからです。こうしておくと最初は生育が遅いのですが、途中から逆転し、力強く成長していきます。私はこの方法で今年、3メートルの高さに育った苗からトマトを収穫しました。りんごの生産者なので、脚立があるから収穫も問題ありませんでした。

【根が先にありき】

稲については、「苗の段階では肥料を使ってもいいのではないか？」とよく聞かれます。これは自然栽培の生育の遅さ、それへの苛立ち、もしくは質問であると思います。種籾からしっぼが出てくる。多くの方はこれを「芽」だと思ってしまうのですが、これは「芽」ではなくて「根」なのです。先に「根」がないと「芽」が出てこないのです。「根」が育ってから「芽」が出る。無肥料でやると生育が悪いというのは、こうした事情なのです。「根」の充実が先であって、その後に「芽」が出る。だから「芽」が出てくるのが遅いという訳なのです。

【黄緑はクチクラ層】

それと自然栽培のものは黄緑色だとよく言われます。一見みずみずしさがなく、元気がな

いようにも見えます。なぜこうなるかという、たとえば大根の葉。茎の部分に半透明の膜、クチクラ層があります。この層が黄緑色にするのですが、湯に入れると溶けてしまい、青々とした濃い緑になる。この層が病害虫から自分の体を守るのです。線路の草は肥料を与えていませんが、自分たちの体を肥料にして翌年に命をつなぐ。線路沿いの草はよく見ると薄緑で、虫や病気にも強いのです。

【浮かぶトマト・沈むトマト】

“水に沈むトマト”と“浮かぶトマト”がありますが、“水に沈むトマト”は細胞がひとつずつ分裂していくので身がぎっしりと詰まっています。一方、“浮かぶトマト”は、輪ゴムの伸ばした時と同じと考えればよい。図体だけが大きくなり、中身が詰まっていないのです。“浮かぶトマト”はアブラムシに食べられてしまいます。私は歯がないのですが、アブラムシも同じ。硬いものには齧りたくても齧れないのですね。“水に沈むトマト”、これは細胞一つ一つが分裂して体を形成するから強く、当然表皮も硬い。だからアブラムシは齧れないのです。輪ゴムの伸ばした時のような“浮かぶトマト”は、表皮が薄く食べやすいのです。皆さんトマトを買ったとき、よく観察してみてください。切ってみて、空洞が大きいものはなるべく買わないようにして、空洞部分がないものをおすすめします。

雑草も同じです。アブラムシがついているもの、とついていないものがあるのですが、よくよく観察すれば原因が分かる。付いている草の根元をよく見てみると、ジュースの空き缶とかお菓子の残骸とか、必ずそこに何かがあるはず。だから虫にやられるということは、虫が来る環境をわざわざ作って、「来てください」と言っているようなものなのです。虫が来ないようにするには来る原因を取り除けばいいだけなのです。

【枯れる野菜・腐る野菜】

河名)

これは2年前と1年前、そして今年の木村さんのりんごですが、後ろの人は分かりにくいと思いますが、腐らないで枯れていっている様子が分かると思います。一般の農薬・肥料で作られたりんごはこうはいきません。みなさんもダンボール箱に入れていたりんごが傷んでいく様子を見たことはあると思います。傷むりんごは溶けてドロドロになっていきます。これは肥料の影響が考えられます。有機栽培といえど、肥料の質によっては腐るといった結果になります。自然栽培のものは土から肥料が抜けていけばいくほど、枯れていくこととなります。りんごに限らず野菜やお米でも、私たちの体内でこのように分解されていくと思うと、気持ちが悪いですね。りんごはそうでもありませんが、腐っている野菜なんかのビンのフタを開ければ、この世のものとは思えないほどのオゾマシイ臭いがします。

一方、枯れていく自然栽培のピンはそのままの「りんごの匂い」がします。本物は枯れていきます。野を見ても山を見ても、腐るのではなく、枯れていきます。だから私たちは、「自

然栽培のものを食べなきゃ損だ！」という思いで仕事をしています。ナチュラル・ハーモニーでは新しく生産者とお付き合いさせていただく場合は、その生産者の作物をこのようにビンに入れて、チェックをさせてもらっています。そうすることで、どのような土の現状か、ひとつの判断材料にしています。



枯れる木村さんのリンゴ 左から1年目 2年目 3年目

木村)

生産者の方にはこうしたビンを見て、もしくはご自分でビンを作って、自分の作物について考えて欲しいと思います。

河名)

木村さんは生産者と話しをするときは本当に怖い。本気で叱るのです。プロとして「本気で取組め！」というメッセージが厳しさの裏にあるのです。

【キュウリと愛情】

キュウリも見分け方があって、愛情かけて育てたか、そうでないかがすぐ分かってしまうのですよ。キュウリに蔓がありますよね。それに人差し指を立ててあげると蔓が巻きついてくるのですね。カンカン照りの中やってもだめですよ。夜明けの時間、5時か6時頃やってみるといいですよ。

【ネギが嫌い】

キャベツに代表される葉物についてですが、モンシロチョウが問題になります。葉の裏にこれを防ぐためには、キャベツだけの単一栽培をしないことがポイントです。キャベツを

植えたら他の作物も植える。こうすることでモンシロチョウを防ぐことができます。特にオススメなのは、ネギ。ネギが育ってきたら先を取ってやると臭う。この臭いをモンシロチョウはひどく嫌います。いつかネギを植えてモンシロチョウが飛来するシーンを目撃したのですが、ネギの上空で急上昇したのですね。ネギの臭いが嫌いというわけです。これを見たときに思いついた方法です。

ただ、もちろん虫が必要以上に作物につくのは、土の中の肥料や農薬などの不純物の影響です。人間の成人病や不摂生と同じで、食生活が病気を呼び起こしているのです。食は土と植物でいえば肥料です。

肥料・農薬を土からきれいに掃除するために植物は吸い上げる。そして虫や病気によって浄化しているわけですね。

だから、最終的には果樹でいえば樹。畑で言えば種子とともに土を作っていくことが非常に重要になります。大豆を植えるのも栄養補給のチツツが目的というよりは、土を作るのが目的。虫をネギで追い払わなくても、土とタネができてくれば虫は寄ってきません。

【根の量】

河名)

今までの農業は農薬・肥料依存で何も知らな過ぎたということですね。多くの生産者の方は木村さんに会って話をすると、最初は「一反歩くらいかな？」と言っていたのに、話を聞き終わるや否や、「一町歩やってみよう！」と思うわけです。木村さんに聞いて面白いなと思ったことに、稲の収量ですが、大体一反歩で6~7俵です。そこから出るワラの量は約500~600キロだということです。驚いたのは、その根っこの量は約5倍だということです。つまりは2~3トンですね。この根が土に戻ることで、腐植に富んだ土になっていることが考えられます。

木村)

作物を収穫する際には、根っこを残すことをお勧めします。根を残しておくと、次の年その圃場で育てると本当によく育つのですね。自分の体で土を作り、次の生命へ繋いでいく。肥料を入れた作物は根っこが短い。肥料を入れない作物は根が長い。肥料を入れると根は自分で探さなくても、周りにたくさん栄養分があるから怠けてしまうのですね。根は自分に必要な栄養は、地中深くどこまでも探すのです。これは人間も同じですね。

【稲の花】

木村)

稲の花が咲くのを見たことがありますか？肥料を与えた稲と自然栽培の稲では花の咲くタイミングが違います。肥料を与えている稲は、茎の部分が伸びきって、その後に花が咲

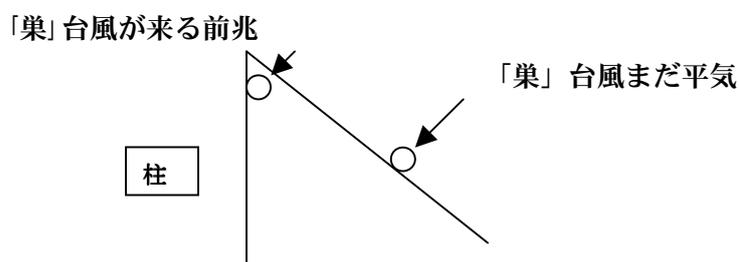
きます。自然栽培の稲は茎の部分が伸び切ってからではなく、茎が成長していく過程において花が咲く。寒いと茎を伸ばすのをやめるといった具合に、自己調節機能が働くという訳です。自然栽培のリズム、農法に任せると、自分の体をこのように調節して守っているのです。



イネの花

【台風の前触れ】

台風の前触れについては、屋根と柱の接触部分を見れば分かります。クモやアシナガ蜂が雨や風を避けるために奥に入って巣を作っているのです。中間点にいる時はまだ大丈夫なのです。このことは台風によって何度も痛い目にあってきたので、さまざまな研究をしました。その結果分かったことなのです。



【種と土】

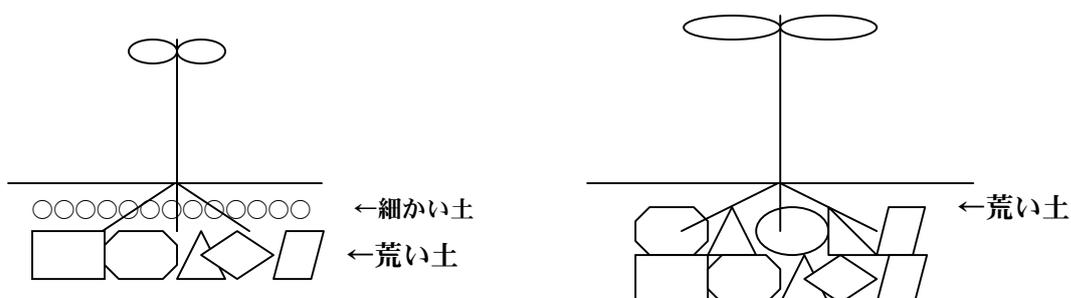
木村)

あと、種子の大きさに合わせて土の耕し方を考えてみてください。ほうれん草など、種子の小さいものは細かい土が適します。表面に近い部分は細かく、その下は粗い土だと最適です。大豆やトウモロコシなど種子の大きなものは土がゴロゴロとしている所に入れる。

土が大きいと酸素がよく土の中に入り育ちもよいのです。このように種子の大きさを見て植えることをお勧めします。

【小さい種】ほうれん草、小松菜など

【大きい目の種】とうもろこし・大豆



【最大の肥料】

昔ある人が、「胡桃の木を木村の言う通りに声をかけ、肥料を入れず、10年経っても一つも実が取れない」というのですね。そこで「今年実を付けなかったら伐ってしまうぞ!」と胡桃の木に向かって、怒鳴ったそうです。するとその年からずっと実をつけているというのですね。最大の肥料は作物に対する人間からのコミュニケーションなのですね。だから最大の農薬や肥料は生産者の手であり、目であり、耳であって、作物に対する愛なのです。

すぐにできないと言うのではなく、できるようになるための努力をすることが大切です。これは何も農業に限ったことではなく、あらゆる仕事に当てはまることだと思います。同時にそれは人間としての義務であるように感じるのです。

【本物のトレサビリティー】

河名)

“木村節”をずっと聞いていた気持ちになります。残念ながら時間になってしまいました。最近すごく嬉しいメールをもらったのですが、その方は重度の化学物質過敏症で、症状がさらに進んでしまい、何も口にすることができなくなってしまったというのです。いろいろな情報を集めて、それこそ“ワラにもすがる”ような思いで木村さんのジュースを口に含んでみた。すると喉を通ったというのですね。言葉は悪いのかもしれませんが、この方がある意味で実験台にして、自分たちが自信を持って開発したものを「これはどうですか?」という具合に食べてもらっているのです。この方が食べられるものはより自然な「本物」に値すると考えるからです。

「トレサビリティー」といわれて久しいですが、単にデータを揃えるだけの、表面的なものに終始している感は否めません。履歴も完全公開されていないものばかりで、使われてい

る種や菌まではまったく分からないのが一般的です。私たちは「これが本物だ!」ということをお伝えし、その理由をお伝えし、本当に安心して食べてもらえるように、種や菌まで、どこまでも遡って履歴を公開しています。そして肥料や農薬を使わずとも育つ自然の力を活かして育った自然栽培の普及により一層取り組んでいきます。

私たちナチュラル・ハーモニーはこれからもずっと皆さんに本当に安心して、しかも喜んで食べてもらえるように、「本物」を追い続けていきます。

【自然栽培の意味】

木村)

私からもひとこと。

ナチュラル・ハーモニーさんのように、私たち生産者と消費者のみなさんをつないでくださる方々がいることで、自然栽培の取り組みを多くの生産者ができるようになっています。

私の話を聞いてただ感動しても、正直みなさんにとって、本当の意味で役には立たないと思います。リンゴの実がリンゴの樹がお日様とともに実らせてくれました。みなさん自身に稔りをもたらすのは、やはりみなさん自身です。

そういった意味で、わたしも消費者の一人として考えたとき、日本のこれからの農業を考えたとき、消費するというのは、社会の方向性を決める行為なのではないかと思うのです。この自然栽培の野菜やお米、リンゴやみかんなどを食べることは、みなさん一人一人にとって、ご自身の健康や安心安全にとっていいだけでなく、社会に自然を問いかける意味のあることだと思うのです。

みなさんに、わたしのやってきたことを踏み台にして、世を変えていっていただきたい。この自然に添った、自然に学ぶ農業、自然に習う生き方をいっしょに育てていただきたいと願っています。私自身はこれからも、河名さんと一緒に日本中、世界中の農家さんに自然栽培のことを伝えていきます。これからもそれを続けていくつもりです。

そして多くの方が自然栽培の実践を少しずつですが、関心を持って始められようとしています。ぜひみなさんには、本当に世界中探しても見つけることの難しい、だけれども、世界をもしかしたら根本的に救えるかもしれないようなこの農業と一緒に育てていただければと思います。わたしはそんな農業だと思っています。

すばらしいことがこの農業にはたくさんあります。

ぜひみなさんも生活に取り込んで、日々の暮らしを通して実感していただければと思っています。何より、みなさんの生活に活かしていただきたいのです。

本当に今日はありがとうございます。

河名)

本当にこの自然栽培のあゆみは、だれのためでもあると実感しています。食べる人にとってもよく、作る人にとってもよく、流通するわれわれにとってもいい。ただ、できるようになるまでに、それなりの時間と労力、自然を知るための訓練が必要です。だからこそ、農薬もそして肥料すら使わない自然栽培を支えていただきたいのです。

そしてみなさんとともに、体の健康を取り戻しながら、土と心の健康、生命力、自然の意味を知っていったらと思います。

本当に今日はありがとうございました。木村さんに大きな拍手をお願いします！！



木村秋則氏とナチュラル・ハーモニー代表 河名秀郎 木村氏りんご園にて

【2008年10月 対談を振り返って 河名秀郎】

この木村さんとの対談以降も、私たちは自然栽培の普及のために全国を飛び歩いています。そして、最近では、依頼されて韓国にまで木村さん、千葉県の高橋博さん、秋田県の石山範夫さんと一緒に自然栽培の指導のために訪問することもあります。また、韓国からも何度も、研修視察があり、木村さんや高橋さんや石山さんの所へ案内しています。

2004年には木村さんや高橋さんをはじめとする方々が取り組む自然栽培の農産物だけを取り扱う個人宅配「ハーモニック・トラスト」を立ち上げました。生活に定期的に少しでも農薬・肥料を使わない自然栽培の農産物を取り込んでいただくための宅配です。定期的なお届けの登録をしていただくことで、まだまだ希少な自然栽培の生産者に計画的に生産依頼がしやすくなる。自然な土を畑に再現する自然栽培を「作り手」と「暮らし手」と「つなぎ手」が共に育てていくことをコンセプトとして立ち上がりました。

2000年ごろはまだ自然栽培の農家は私たちが取り扱う中で数件もありませんでした。それが2008年では、直接取引する農家さんが100件近くになってきています。個人宅配の会員さんも2004年の22人から2008年では、200倍ほどに広がっています。対談しているところと比べると木村さんも私もさまざまな発見があり、自然栽培の技術も改善されてきています。ここまでの広がりも木村さんをはじめとする先駆者の方々の功績は大きく、その自然に向かう姿勢からは、21世紀の人類にとって示唆に富んだ知恵がにじみ出ています。



木村秋則氏推薦！！
自然栽培に限った宅配
個人宅配「ハーモニック・トラスト」

生活に継続して取り込み、あなたの「心と身体の健康」と「土の健康」の両立を図ることに関心のある方はぜひ個人宅配「ハーモニック・トラスト」の資料をご請求ください。

あなたは農薬と肥料のリスクを避けあなた自身を守りながら、家族を守り、そして農家の目の土を守ることができるのです！そのリアリティーこそが「ハーモニック・トラスト」の醍醐味です！！

● 個人宅配「ハーモニック・トラスト」の資料請求はこちらから

<http://www.naturalharmony.co.jp/trust/harmonic-trust/siryouseikyu.html>



推薦文

芸術自然栽培研究会会長 木村秋則氏



ナチュラル・ハーモニーの河名さんは、何よりも他人のことを自分のことのように考えていく思いやりのある人です。そんな河名さんとの出会いは2000年ごろ。

私のような栽培をしているものにとって、一番のネックは流通でした。その流通をスムーズにできるようになれば、日本の農業は変わるんじゃないかな？とっていたちちょうどその頃、河名さんが私のところに突然訪ねてきました。そして、自然食品の流通をしていることを知りました。また、河名さんは虫・病気の原因は肥料にあるという概念をすでに持ち合わせていました。河名さんと一緒に日本の農業を変えよう。そして流通は河名さんに引き受けてもらいましょう。そういう明るい将来が見え、初めて会ったのにも関わらず、不思議と心が通い合いました。

農業が環境を汚染しているという現実には、ニュースにもなりません。環境汚染は工場などの産業が槍玉に挙げられていますが、農業による環境汚染は食を生産するという大義名分の裏に隠れてしまっています。自分たちが壊してしまったものを次の世代へそのまま引き継いではいけない。今ここで歯止めをかけていかないと、という思いが強くなり2人で農業指導の全国行脚を始めました。農家から要請があれば奄美大島や北海道など、どこへでも出かけました。今では日本のみならず韓国まで出かけるようになり、訪れた農家も数百人になります。流通という一番のネックを河名さんが、引き受けてくれることにより、買ってくれるところがあればやってもいいという農家が点々と現れてきています。

河名さんは人から聞いただけで自分では納得のいかないものは、試してみようという性格の持ち主です。いろんな発見を彼自身がしていき、この世界の単一的なものに流されない、芯を持った人です。一人で欲を求めるようなこともしません。みんなして笑っていこうという考え方を持っています。いいことをみんなに普及してやろうという思いがあるからこそ、自然栽培がここまで広がってきたのでしょう。成り立たないと思っていた大きなプロジェクトが、河名さんにより広がっています。

河名さんの社会的役割はきわめて大きいと思います。ぜひ日本一、世界一の流通をやってもらいたいです。

ナチュラル・ハーモニーの個人宅配「ハーモニック・トラスト」は、肥料も農薬も与えない自然栽培の農産物だけを取り扱っています。これは本当に貴重な取り組みです。自然栽培を支える人、作る人、つなぐ人が一体となって農家と土と作物を支える取り組みです。

自然栽培に取り組む多くの農家にとって、この取り組みは支えとなっています。

みなさんとともに私もこの栽培を通して、自然を知る学びをしています。相手を自分のことのように思う人としての学びをしています。そしてそんな生き方をこれからも実践していきたいと思います。

木村秋則

NHK プロフェッショナル出演 2006年12月
自称リンゴ手伝い業
自然栽培リンゴ農家
芸術自然栽培研究会会長
著書『自然栽培ひとすじに』
石川拓治著『奇跡のリンゴ〜「絶対不可能」
を覆した農家 木村秋則の記録』
竹下文子著 『リンゴのおじさん』

● ナチュラル・ハーモニー代表 河名秀郎の講義録「食は芸術なり」を無料贈呈中！
こちらのアドレスからお申込みください。

<http://www.naturalharmony.co.jp/trust/harmonic-trust/muryoureport2.htm>

● 個人宅配「ハーモニック・トラスト」の資料請求はこちらから

<http://www.naturalharmony.co.jp/trust/harmonic-trust/siryouseikyuu.html>

● だれでもカンタン！目からウロコの本物の野菜の見分け方はこちら

<http://www.naturalharmony.co.jp/trust/>





ナチュラル・ハーモニー代表 河名秀郎のナチュラル☆ライフ実践セミナー

http://www.naturalharmony.co.jp/trust/school/natural-life_.html

ナチュラル・ハーモニー代表河名が自然栽培や天然菌から学んだ自然を主として「医者にもクスリにも頼らない生き方」をさまざまな形から伝えています！

全4回の講座です。

ナチュラル・ハーモニーが実践してきたノウハウのすべてが詰まっています！

今真摯に問いかける、

健康とは…!? 食とは…!? 自然とは…!?

セミナーは随時開催しております。興味のある方はこちらをクリックしてください。

http://www.naturalharmony.co.jp/trust/school/natural-life_.html

株式会社ナチュラル・ハーモニー

本社： 東京都世田谷区玉堤 2-9-9

宅配事業部： 〒289-1115 千葉県八街市八街ほ 661-1

TEL 043-440-8566 (10:00~18:00 土曜日定休)

FAX 043-440-8577(24時間自動受信)

MAIL: trust@naturalharmony.co.jp